

第126号

発行人●医療法人近森会 近森正幸
 編集人●平野政夫/事務局●川添具
 高知市大川筋一丁目1-16 TEL.(0888)22-5231

びるっば

医療法人近森会院内誌

近森会創立50周年の年頭にあたって

「患者さんにとってどうなんだ」 を判断基準として



医療法人近森会理事長 近森正幸

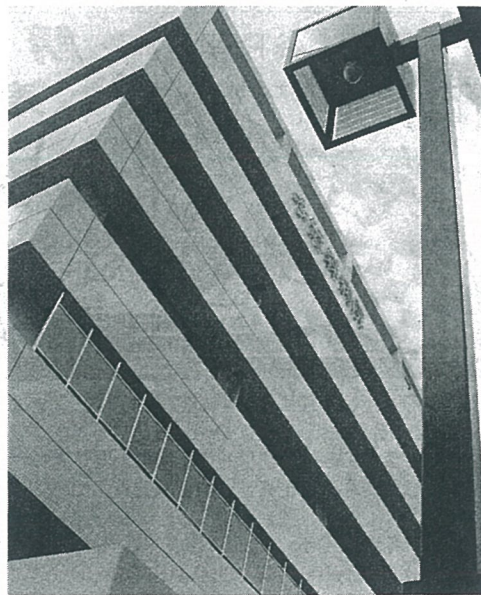
設立当初、父と母は二人で「近森外科開業」と書いたビラを、ご飯つぶを糊にして電柱に貼って回ったと聞いたことがある。父は診療に没頭し、母は給食を受けもち、一家で病院を切り盛りしていた。その後、父は整形外科をはじめ脳神経外科、人工透析と、自分で勉強しては近森病院に新しい分野を導入していった。

毎日のように夜も眠らずに働き、次々と病院を拡大していった父には、医師としての高いプライドと夢があり、いつか「日本のメイヨーにしたい」と呟っていたことを憶えている。「必要のない医療をやるくらいなら、しんどくても救急をやりたいたい」と昭和三十九年に救急病院の告示を受けた。

こうして病院は大きくなり、近森家の病院から、近森会の病院に生まれ変わっていった。そうしたいわば企業体としての形態の基礎をつくったのが会社経営の経験をもつ野村好直前事務長で、当時院長とよく口論をしていたのは、組織体としての近森会に生まれ変わる生みの苦しみであつたかも知れない。

田村先生と梶原婦長によって第二分院が新しくつくられたが、このときはじめて理事長以外の人間が主体となつて、建物から組織までをつくりあげてくれた。以来、近森会のさまざまなプロジェクトは、その担当部署が主体となつて企画から実際の建築、組織づくりまで行ってきた。近森リハビリテーション病院にしても石川先生や河原木婦長たちによって便器の高さを一センチ単位で検討してつくりあげたものだ。

昭和五十九年十一月二十六日、前理事長である近森



正博は逝った。病院の量的拡大に努めたが、一方で機能分化や組織づくり、システムの構築について、合理的な考え方を近森病院に植えつけてくれていたと、いま改めて気づかされている。

昭和六十二年の本館増改築によって、「これで近森はつづれる」としきりにいわれた。そのころはまだ増床のための投資という考え方が根強く残っていて、ベッドも増やさず、直接収益につながらない無駄な投資だということである。しかし、このことで近森病院の医療の質を格段に向上することができた。

この本院増改築工事を契機として、コンピュータシステムによる情報の一元管理や、本院の新館が建設され、外来機能の飛躍的アップと病棟のアメニティ向上につながった。さらに基準看護の導入が近森会における看護の独立となり、組織体としての近森会へと決定的に移行するきっかけとなった。

これまで何回となく訪れた近森会の大きな岐路に「患者さんにとってどうなんだ」を自分の判断基準として対処してきた。理事長就任以来十二年、あやまたず理事長職を全うしてこれとしたら、それはこうした基準があつたからだと思つている。

これからの近森会も、患者さんに求められるより質の高い医療を行っていくことを絶えず考えていなければならない。それが近森会の変わらぬ医療の原点であり、わたしたちこそが、医療の本道を歩んでいるのだと確信している。
(ちかもり まさゆき)